北里柴三郎の死

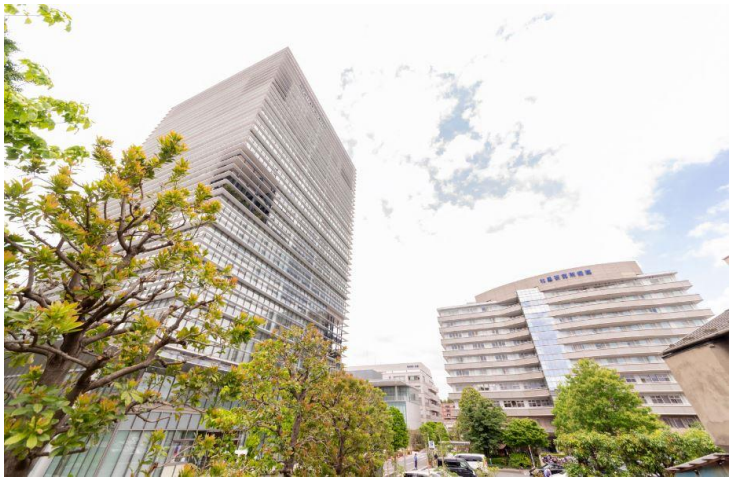
昭和 6 年(1931 年)6 月 13 日、北里柴三郎は突然の脳溢血で 78 年の生涯を閉じました。北里の訃報は当時まだ珍しかったラジオの臨時ニュースで全国に放送され、翌日の新聞各紙でも一斉に報じられました。さらに、訃報は国内だけでなく、全世界に向けて伝えられました。6 月 17 日、葬儀会場となった青山斎場は多くの花輪で埋め尽くされ、医学会や政界の名士が一堂に集まり、その数は 4000 人を超えました。北里の墓は青山墓地にありますが、それとは別に、北里研究所の師弟たちが、かつてコッホが亡くなった年に北里が建てた「コッホ祠」の傍に、「北里祠」を建立しました。その後、昭和 20 年の東京大空襲の際に北里祠は消失しましたが、幸いにもコッホの祠は残ったため、コッホと北里を合祀して「コッホ・北里神社」と改称しました。現在、北里研究所の守護神としてお祀りしています。

コッホ・北里神社
学校法人北里研究所
北里柴三郎記念室提供

港区白金にある北里研究所に毎月足を運び、出筆原稿に御教示をいただく際に、コッホ・北里神社に参拝に立ち寄るのが私（筆者）のルーティーンでした。人類と感染症との決して終わることのない闘いに生涯をかけた、東西 2 人の医聖。新型コロナウイルス感染症の感染者数が連日ニュースで報道される中、彼らを奉るこの社に宿る神々しさを肌で感じるとともに、コロナ禍の収束を 2 人に祈るばかりでした。

省みて、北里はドイツのベルリンに留学し、憧れのコッホの下、欧米人が先導する微生物学の分野で研鑽を重ね、破傷風の純粋培養の成功や免疫血清療法を生み出す等、世界初となる数々の画期的な研究を成し遂げました。その業績が高く認められ、第 1 回ノーベル生理学医学賞の候補に挙がる等、北里はその名を世界に知らしめた最初の日本人となったのです。世界から賞賛を受けた北里は、ケンブリッジ大学の細菌学研究所長を始めとする世界最先端の研究機関での地位や名誉が約束されていたにもかかわらず、それらの招きを全て断り、帰国することを決めていたのです。当時の日本には、北里が入るべき研究所すら存在していませんでした。しかし北里には、国費を注ぎ込んでドイツ留学を許してくれた祖国への感謝と、コレラ、結核、ペスト等、多くの感染症に苦しむ祖国の人達のために働こうという強い思いがあったのです。そして帰国後には、日本初の伝染病研究所の創設や、世界三大研究所の 1 つに数えられる北里研究所の開所、慶應義塾大学医学部の設立、さらには日本医師会初代会長の就任等、人材と組織という両面から日本の近代医学の礎を築き、その発展に大きな貢献を果たしました。

北里の人生において常にその確信にあったもの、それは医学を学術的な研究対象として捉えるのではなく、病気の治療と予防を何よりも最優先に考える医師としての誠実な姿勢に他なりませんでした。北里が「北里研究所」を設立してから半世紀、創立 50 周年事業として、昭和 37（1962）年に「学校法人北里学園」が設置され、「北里大学」が設立しました。開校した当初は、衛生学部があるだけでした。それ以降、薬学部、畜産学部、衛生学部、教養部、医学部（医学科）が増設されます。北里は常々、「事を処してパイオニアたれ。人に交わって恩を思え。そして叡智をもって実学の人として、不撓不屈の精神を貫け」と門下生に説いていました。その信念は、「開拓」「報恩」「叡智と実践」「不撓不屈」を建学の精神として、今なお北里大学に深く息づいています。



港区白金「北里研究所」　全景
学校法人北里研究所
総務部広報課提供

最後になりますが、未知の感染症に挑んだ北里柴三郎博士の生涯を追うにあたり、この 1 年以上にわたる御指導と様々な資料の御提供を快諾してくださった北里柴三郎記念室の皆様に、改めて感謝申し上げます。